



目次	
巻頭言	1
特集 弘前大学学術情報リポジトリの JAIRO Cloud	3
への移行について	
本との出会いを楽しむ<20 回>	6
デジタル・アーカイブの紹介	7
図書館に関する話題<20 回>	8
Library News	10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	12

江戸時代の記憶術書『物覚秘伝』 — 記憶術の愉快で奇妙な世界

弘前大学出版会編集長 足達薫



ここ数年、私は、記憶術という一種の魔術的テクニックの歴史を研究してきました。その研究の中で見つけた、江戸時代に書かれた、愉快で奇妙な一冊の書物を紹介します。

記憶術と聞くと、怪しげな受験や資格試験のためのテクニックを思い浮かべるかもしれません。しかし、数えきれない多くの多様な事柄をいつまでも忘れずにいる方法は、すでに古代ギリシアで開発されていました。もっとも広く普及した方法は「場所法」と呼ばれました。まず心の中に家や広場などのイメージ、あるいは人間の身体のイメージを描きます。次に、覚えようとする内容の項目や細部を、それぞれ明確で誇張されたイメージに変換します。たとえば、強盗殺人事件を記憶する弁護士は、真っ赤な血の付いたナイフ、現場の乱れたベッド、返り血を浴びた犯人の顔、金袋などを想像して、最初に心に描いた家の様々な場所に暗記します。

この方法が、どういうルートを経てなのかはまだよく分かっていませんが、江戸時代の京都で書

物になりました。明和八年（1771 年）、京都で出版された冊子本『物覚秘伝』（ものおほえのひでん）がそれです。青水先生という人物が口授した書物だそうです。

この本では、たとえば、人間の身体のイメージを利用して 10 個から最大 30 個までの事柄や事物を覚える方法が図解で紹介されています（図 1）。この方法で創造される人間のイメージは実に珍妙で奇怪な「道具人間」となります。頭に手拭を巻き、額に火鉢を載せ、毛氈（毛織物）で目隠しをして、鼻が硯（すずり）になり、口が琴になり、喉に末廣（扇子）をつけ、両乳は文箱でその間に鏡が置かれ、膨らんだ腹は大きな鍋となり、臍で茶を湧かしているという、愉快で奇怪な人間が生まれます。

青水先生は他にも、『源氏物語』六十四帖（今知られている数え方では五十四帖）の題名さえ覚えることができると言っています。本当にそんなことができるのか練習してみましたが、無理でした。私の記憶力はたいしたことないようです。

私のところにある『物覚秘伝』の版本は京都の古書店で見つけたものです。今は弘大図書館に所蔵され、私の研究室が借り出しています。この書

物を読みながら1人で記憶の練習をしてもつまらない、というか不気味でもあるので、誰か一緒に記憶術を学んでくれる人はいませんか。

(あだち かおる)

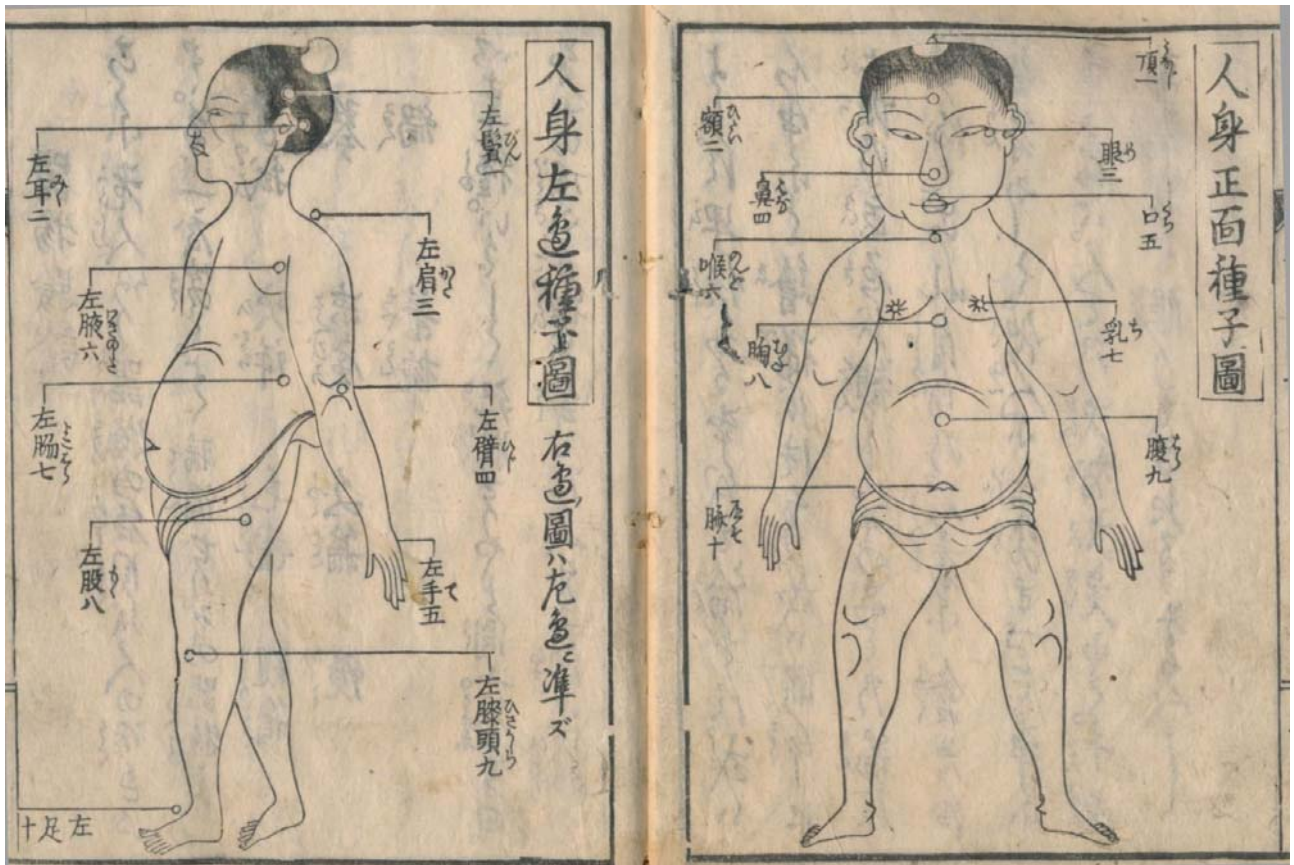


図1 (『物覚秘伝』より)